
beautiful nest

Dreams Ai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

b e a u t i f u l n e s t

【Nコード】

N 0 5 2 4 R

【作者名】

D r e a m s A i

【あらすじ】

初小説 タイトルの日本語訳は「美しい巢」。

カップリングは恋人同士の快青です。

青子ちゃんはキッドの正体が快斗だと知って間もない設定です。

独り（前書き）

初小説。まだまだ未熟です…（><…;

独り

満月の夜空の下……

白い手袋の細い薬指に白いハトが一羽止まる。

「今夜も宜しく頼むな…愛しい相棒さん？」

そう怪盗がハトに言葉を残すと、大都会へと放たされ、盗聴器を右耳に入れてた。

そこは……高層ビルの屋上。

怪盗キッドが高層ビルの屋上に凜とした姿で立っている。

『くっそ！あのコソ盗め！また盗みを犯して盗んだ品を返しやがって！！』

今度こそ、捕まえてやるからな！おい！！警視庁に戻って作戦会議の練り直しだ！！』

静過ぎる夜に耳が唸るほど聞き慣れているパトカーのサイレン音が、響き渡る中、中森警部が部下に怒鳴り散らしながら指示をする。

勢いがある扉が閉まる音。勢いがあるエンジン音。

それはキッドを捕まえる執念が籠もっているかのように、

中森警部が車に乗り込んだ。

警視庁の方へパトカーが長い帯を作りながら、

向かっていくのを、キッドは屋上から確認する。

しばらくすると、先ほど放たれたハトが戻ってきた。

「今夜もご苦労だったな。」

ハトを右手で撫でて褒めながら、左脚に付いている盗聴器を左手で

外す。

どうやら、中森警部の声を盗聴して、
警視庁に戻ることを確認したのだろう。

キッドは右手の親指と人差し指を使い鳴らした瞬間、
白い煙幕と共に泡沫のようにハトが消えた。

キッドは怪盗を無事に終えた安堵に浸る時間もなく、
立ち入り禁止の高層ビルに静寂を包れている踊り場で、
素顔である快斗に変えて、
誰も見られてないよう注意を払い、高層ビルを後にした。

向かうは自分の家。

両手をポケットに入れながら歩き出す。

帰宅ラッシュ後の街……人々が家路に向かう後の寒さが身体
に伝わる。

帰るべき場所に温かい場所が包まれているのだろう。

それが恋しくなる季節が今年もやって来た……

……けれど、

今日はオレの母親が家にいない。

今日は……ではなく“今日も”……と言った方が正しいだろう。

母さんは二日前から、親友とニューヨークへ旅行へ行っている。

「全く……息子が大変だっつーのに……」

呆れ混じりにひとり言を言いつつ、そんな母さんがキライなわけではない。

オレの身勝手な意思で、
親父を継いでキッドになり、数え切れないほど心配させてるのは事実。

そんな母親が家にいない…

今日の帰りから明日の学校まで、誰も関わりがなく過ごす。

一人の夜…そのことがなぜか、胸に過ぎる。

悲しいのか苦しいのか分からないけど嬉しくも楽しくもない。

なぜか孤独を感じる。

怪盗キッドとして世間を騒がせた帰りに、オレは空虚感が不意に襲ってくる。

今までも、キッドの帰りに、母さんが家にいないことが日常茶飯事なのに。

初めてだ…こんな悲しみは…

ハトが翼を休める巣があると同じように…

オレにも翼を休める寝床があるだろうか…

…それはどこにあるだろうか。

親父が亡くなる前日、親父のマジックショーが、

楽しみで張り切って眠れぬ夜に、

本番前夜で休みたかったはずなのに、

オレのベットサイドで、親父が楽しくマジックを披露してくれた夜が、

オレが最後の一人占めできる親父のマジックショーだった。

そして…親父がオレと寄りそって寝てくれた夜から…

ずっと一人だ…

ずっと一人で寝ている…

一人の言葉が「独り」へと変わってゆく…

まるで：「自分よりも強い獣に巢を荒らされて、拳句の果てには親鳥を失ったようだ…

獣がオレが追ってる組織だとして、親鳥はオレの親父…」と、グリム童話のような、意味深で無意味な例えが頭に浮かぶと、フッと口元が歪み笑みを浮かべる。

毎晩寢床があっても：独りで眠ることが怖くなるのがあるだろうか…それが今夜が初めてだとしたら…オレはまだ大人ぶっている子供だ…
と思い、
生き心地さえも消え失せてしまいそうだ。

…結局：オレが翼を休める寢床は空っぽなんだな…っと。

ホントは…そこで寝息をたてているのを…
満月は知っているのを知らずに…

どれくらい時間が経ったのだろうか…

静かに照らす月光。
長く前に伸びる影が、自宅の門を覆う。

月明かりを頼りに、右手のポケットから鍵を出して、
玄関の扉を開けると…

母さんのではない…

一足の小さな白いパンプスが並んであった。

あの光のように…（前書き）

長くなってしまいました。すみません。
最後まで読んでみてください

あの光のように…

灯りが灯られてない玄関先を、街灯よりも明るく満月が照らす…

「…青子がいる。」

オレは確信した。白い小さなパンプスは青子のだ。

冷たい北風が一瞬玄関先を通り過ぎる…

だけど、オレは感じている…

廊下先には、一番安心できるぬくもりがあるのを…

オレは履き慣れたスニーカーを脱ぎ自宅に入る。

「青子…いるのか！？青子！！青子！！」

呼んでも返事がない。

まず、オレが最初に向かったのはリビング。

だけど、リビングの電気を点けても人影がない。

「青子！！いるのか！？青子、返事しろ！！」

何度、叫んでも返ってくるのは、静寂。不吉な予感を感じる。
室内が外より寒さを感じる。キッチンにも人影すらない。

…まさか！！まさか奴らに…

額から、汗が一筋、頬を伝う。

待てよ…確か、オレがキッドの予告現場まで、自宅を出た朝を最後に、

暖房は点けてないってことは、青子はリビングに入っていない。

………ってことは…

オレの部屋に青子がいる。

冷静になったオレは、急にためらいなく、

二階にあるオレの部屋へ、階段を駆け足で上がって向かう。

そして、ボタンと音をたて、自室のドアを開けると…

「あ…おこ？」

………そこには、オレのベッドの上で、寝息をたてながら寝ている青子がいた。

青子がいることを確認して安堵した。

どうやら、青子はオレの部屋へ真っ直ぐ向かい、待ち切れず寝てしまったらしい。

さっき、自宅から外を見ても、一部屋も灯りが点いてなく、

「オレが追ってる組織に攫われたんじゃないか…」と、

青子がいる嬉しさよりも、青子がいない焦りを感じていた。

……だけど、もう大丈夫…。

一旦、呼吸を整えて、自室の暖房を点ける。
呼吸が落ち着くと、息を潜めながら、青子に近づく。

掛け布団を整え直し、青子が寝ているオレのベットに座った。

「ったく、少しは警戒しろよな。」

長くて綺麗な黒髪を左手で撫でながら、呆れ混じりに小声で言った。

青子の寝顔を見るのは初めてではない。ガキの頃から寝顔を見ている。

ましては、一緒に同じベットで寝たことだってある。

だけど、それは幼馴染だった頃の話だ。

今は違う………。

一ヶ月前に、十年間と言う、長い幼馴染の關係に終止符を打った。
二人きりの出掛ける時だけ、手を繋いだり、二人きりの時は、キス
をしている。

けれど、幼馴染と変わらず、毎日一緒に笑い合ったり、

「アホ子〜。」「バ快斗!！」と言い合って、周りが呆れるほど、
相変わらずバカをしている。

学校のヤツらにも、特に内緒にしているつもりではないが、
今のこの關係を学校で知っているのは、白馬、紅子と恵子の三人く

らいだ。

それだけ、幼馴染と変わらず毎日過ごしている。

それで、オレは十分だ。青子が傍にいてだけで幸せに満たされる。だけど、だからって……オレは男だ。

今、彼女である青子の寝顔を見るのは、今夜が初めて。なぜか、心臓の鼓動が少しずつ早まってゆく。

「ううん…快斗？」

青子がオレの名前を呼んだのが聞こえ、一瞬、ピクッと髪を撫でる右手を止める。

心臓がドキッと身体全身に反応して、時間が止まりそうだが、青子は再び寝息をたてる。どうやら、寝言らしい。夢の中にオレがいるのだろうか。幸せな夢を見てるのかな…。

……バーロ…たくアホ子…脅かすなよな…。

まだ、青子は夢の中にいると確信したオレは、高まる心臓の鼓動が聞こえないように、

ゆっくりと静かに、青子の左隣へと、ベットに身体を預けた。

掛け布団を掛けると、青子のぬくもりに安心する。

ほんのちよつと前に、オレが掛け布団を掛け直したのに、青子ってあたたかいんだな。と感じている。

そして、青子の左手を右手で握る。やさしく、やさしく……。

もう片方の左腕を伸ばし、青子の左頬を左手で撫でると、オレはやっと気づいた。

青子の頬が濡れている感触が、左手で伝わってくる。

……また、オレのせいで泣かせちゃったな……。オレの帰りが遅くて、不安になり、拳句の果てには、青子は独りで泣いたのだろう。

青子がオレのことを思いながら泣いていた。そう、考えるのは、自信過剰かもしれない。

だけど、どんな理由であっても、青子を泣かせたくない。

それは、どんな暗闇よりも、どんな不敗よりも、青子の涙を見るのが、一番辛くて、悲しい。

なにも…なんにも、できないオレがいるからだ。

この世界で一番不器用なのはオレなんだろう。

キミの涙を見るだけで、なにもできずに、いつも最初にするのは、

……抱きしめること。

オレは青子を起こさないように、背中へと手を伸ばした。

こうやって今は抱きしめている。ただ、それだけでも、青子を守る。強く、やさしく。

電気を点けていない寢床に、窓から、月明かりがやさしく二人を照らす。

青子のぬくもりを感じながら、そっと目を閉じてみる。

.....キミの深い悲しみを照らす...

あの光のようになりたい...

この声で今なら伝えれる...

けれど少し恥ずかしくて...

こうやって青子が寝ていても、あんなキザなセリフを心で思っても、口では言えない。

不思議な気持ちだ。キッドとして、キザなセリフを吐くことは、慣れているのに、今は違う。

自分ではどうしようもないほど、恥ずかしくて、もどかしくて...

ゆっくりと目を開けてみる。

瞼の裏に月明かりが映っている。

「好きだよ...青子。」

まだ、夢の中にいる青子の左耳にささやき、唇にキスをした。

キスをしたあとに、青子は少し微笑む。

天使のような寝顔.....そんな言葉が青子に似合っている。

.....青子が起きたら、一番最初になにを言おっかな？

ただいま。かな？それとも...おはよう。かな？

キザなセリフなんていらぬ。難しい言葉なんていらぬ。

ただ「好き」の言葉を飽きるほど言いたい...

ただ「好き」の言葉を飽きるほど聞きたいな...

それだけでいい...

あの光のように…
あの光のようになれる気がして…
もう一度、ゆっくりと目を閉じた…

あの光のように…(後書き)

完結しているようで、完結してませんWWW
次で完結する予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0524r/>

beautiful nest

2011年10月7日12時41分発行